【2022 年度優秀卒業論文】

感覚日記の議論が私的言語論の中核をなすと言えるのはなぜか

――ウィトゲンシュタイン『哲学探究』§258 の一解釈

佐伯　優輔

Ⅰ　アブストラクト

ウィーン出身の哲学者ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein, 1889-1951）の主著である『哲学探究』（*Philosophische Untersuchungen*, 1953、以下『探究』）では、言語・意味・知識をはじめとした様々な哲学的問題が考察されている。そのなかでも、§243 以降の私的言語に関する議論は、様々な解釈や論争をうむ箇所として、注目されてきた。通常、それらの節は総称して、「私的言語論（the Private Language Argument）」と呼ばれる。本論文では『探究』を一次文献に据えつつ、そこで考察された主題のひとつである私的言語についてのみ扱うこととする。特に、§§243-58 を主要な分析対象として、§258 が私的言語論において中核を担うとされる理由を明らかにする。このことを本論文の目的とする。

本論文では、§258 以前を精読することにより、「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」こととの各論点が、私的言語という想定には必要不可欠であることを示す。私的言語を想定するための条件を確認した後、§258 冒頭の感覚日記という想定が、私的言語の具体例であることを指摘し、§258 で私的言語の不可能性が主張されていることを示そうとする。

第Ⅱ章では、私的言語論の伝統的な解釈と、そうした解釈における問題点を説明する。伝統的な解釈では、私的言語は不可能である、ということを私的言語論から導かれる帰結だとみなしている。その帰結は、§258 を論拠にして語られてきた。本論文は、§258 単体ではその帰結を導けないと指摘し、§258 以前の各節から読み解くことで、伝統的な解釈の妥当性を検討する。

第Ⅲ章では、私的言語の定義とその想定における条件を確認する。まず、私的言語の定義から「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」こととを抽出する。次いで、「直接的」と「私的」という表現が何を意味するのかを明確にする。

第Ⅳ章では、私的言語の想定例が感覚日記であることを示す。そのために、定義のどちらかしか満たさない言語は、私的言語ではないことを明らかにする。続いて感覚日記は私的言語の定義を満たすが、感覚日記で想定される記号に意味をもたせることが不可能であるた

め、その記号の使用を理解することは不可能である、と論じる。

以上より、§258 が私的言語論の中核をなすと言えるのは、その箇所が私的言語の想定例とその不可能性が示されているからだと結論づける。この結論は、私的言語論の伝統的な解釈と対立しないが、各節との連続性の観点からその結論を導出することに、本論文の意義がある。

第Ⅴ章では、デビッド・スターンの解説を援用し、私的言語論の伝統的な解釈のうちで見解の相違がみられる論点を示す。その論争に対して、本論文で示した意義に基づき、新たに争点となっている言語は私的言語に含まれないと回答する。その回答の論拠は、§§243-58 を精読することで、すでに明確となっている。だからこそ、各節を連続的に読み解くことは、意義のあることだと示す。

Ⅱ　問題提起

本論文は、§§243-58 を主要な分析対象として、§258 が私的言語論において中核をなすと言える理由を問うものである。本章ではまず、私的言語論に関する伝統的な解釈の概略をまとめる（第１節）。これまでウィトゲンシュタインの私的言語に関する議論は、他の哲学に影響を与えうると解釈されてきたため、その議論が意義をもつことは共通認識となっている。他方、その議論の解釈については見解の相違がみられる。とりわけ、その議論が私的言語論という枠組みのなかに置かれ、ウィトゲンシュタインはそこで私的言語の不可能性を主張している、と解釈されたことが論争を引き起こしている。

次に、先行研究における問題点を指摘し、その問題を解決するために本論文がどのように議論を進めるかを示す（第２節）。私的言語論に関する伝統的な解釈では、その不可能性の論拠が、§258 に置かれてきた。その解釈に基づき、一部の先行研究では、私的言語とは、§243 後半で定義された言語のことであり、§258 の感覚日記の議論でその不可能性が示されている、という簡略化した理解がなされることがある。けれども、§243 後半のみでは、§258 冒頭にて感覚日記が登場する理由に答えることは容易ではない。感覚日記が想定される道理を明確にするためには、§258 と関連している各節を参照する必要がある。本論文では、§258 を含む一連の節を分析の対象とすることで、感覚日記という想定がなぜ行われているのか、その想定から私的言語の不可能性がどのように主張されているのか、に答える予定である。

１．私的言語論はどのように問われてきたのか

ウィトゲンシュタインの死後に出版された『探究』では、直示的定義や言語ゲーム、家族的類似といった特有の概念が登場するだけではなく、言語・意味・知識をはじめとした様々な哲学的問題が考察されている。このように『探究』で取り扱われる内容が多岐にわたるため、それを連続的に読み解くことは難しく、解釈も容易には定まらない。そのなかでも、§243 以降の私的言語に関する議論は、様々な解釈や論争をうむ箇所として、注目されてきた。そ

の理由として、§§243-315 それ自体は、『探究』から独立して分析できる箇所として扱われてきたからである。通常、それらの節は総称して、「私的言語論（the Private Language Argument）」と呼ばれる。伝統的な解釈[1]では、そのような読み方を前提として、私的言語論で何が論じられているかが主に議論されてきた。

本論文では、『探究』を一次文献に据えるが、そこで考察された主題のひとつである私的言語についてのみ扱うこととする。さらには、伝統的な解釈で特に関心を向けられてきた、§258 をどう読み解くかに着目する。以下ではまず、私的言語それ自体が問いとなりうるのはなぜか、私的言語論が伝統的にどう解釈されてきたのか、を簡潔にまとめることで、本稿で提起する問いの背景を論じる。

『探究』における私的言語という概念が問題となるのはなぜか。その問いには、いくつかの回答が与えられてきた。たとえば、デカルトやヒュームを引き合いに出すことがある。その解釈では、近世以降の哲学では、私的言語という概念が暗黙の了解とされていたが、ウィトゲンシュタインはそれに対して反駁している、と説明される。つまり、ウィトゲンシュタインの主張は、伝統的で有力な哲学諸議論に影響を与えるため、哲学史的に意義のあるものだと述べられることがある[2]。

この見解に対してデビッド・スターンは、ウィトゲンシュタインがデカルトやヒュームではなく、フレーゲやラッセルなどの同時代の哲学者たち、あるいはウィトゲンシュタイン自身の中期の哲学に対して批判していると解釈した方が自然であろう、と述べている[3]。いずれにせよ、そうした主張では、影響を及ぼすとされる対象は異なるが、私的言語論が、認識論や心の哲学、もしくは哲学全体に対して広く影響を与えるものだということは共通した理解となっている[4]。他方、私的言語に関する議論の解釈については見解の相違がみられる。

私的言語論の伝統的な解釈では、私的言語論とは私的言語の不可能性を示した議論である、ということが自明視されている。すなわち、私的言語は不可能である、ということを私的言語論から導かれる帰結だとみなしている。その解釈は、『探究』における私的言語に関する議論を、私的言語論として抽出できるという前提に支えられている。だが、私的言語論という枠組み自体が、伝統的な解釈を支持するかどうかに関係なく、特定の節のみへの言及を許してきた。それゆえ、私的言語論という読み方そのものが、『探究』を恣意的に取り出しているとして、原文における主張をないがしろにしている、という批判がある[5]。

とりわけ、§258 は私的言語論で引用されることが多い箇所の一つである。その主な理由は、§258 が私的言語の不可能性をまさに示している箇所だと解釈されてきたからである。より丁寧に言えば、私的言語の具体例として、§258 で想定されている記号には、意味をも

---

1 「伝統的な解釈」とは、Stern（2011）の「The Orthodox Interpretation（正統的な解釈）」を指す。
2 ケニー 1982, p. 236.
3 他にもスターンは、フォダーからチャーマーズに至るまでの、表出理論を支持する現代の哲学者も批判の一対象として挙げている（Stern 2011, p. 336）。
4 Stern 2011, p. 336.
5 Stern 2011, pp. 337-9.

たせることが不可能であるため、そのような記号の使用を理解することは不可能である、と解釈されてきた。伝統的な解釈では、私的言語は不可能であるという主張が、§258 を論拠にして語られてきた。

以上が、『探究』における私的言語を問うことの意義と、私的言語論に関する伝統的な解釈の概略である。次節では、このような伝統的な解釈に対して、本稿では何を論じる予定であるのかを示す。

２．私的言語論はどのように問われるべきか

本論文では、§258 が私的言語論において中核を担うとされる理由を明らかにする。§258 が私的言語論の中心であると言えるためには、その周辺も含めた全体像を明確にしなければならない。つまり、§258 がそれまでの節とどのように関連しているのか、を示す必要がある。しかしながら、先行研究では、その観点はあまり重要視されていないように思われる。なぜなら、私的言語論の解説に前提と結論しか示していない場合が少なくないからだ。その前提とは、§243 後半のことであり、結論とは、§258 のことである。§243 後半が前提とみなされるのは、私的言語の定義がなされている箇所だと解釈されるからである。それゆえ、一部の先行研究では、私的言語とは、§243 後半で定義された言語のことであり、§258 でその想定例と不可能性が示されている、という簡略化した理解がなされることがある[6]。本稿は、そのような読み方を真っ向から批判するつもりはない。

しかしながら、たとえそのような読み方を擁護するとしても、特定の箇所のみに言及するだけでは明らかに説明が不足している。§258 で、ウィトゲンシュタインは自分自身の感覚を日記につけるという不可解な想定を持ち出している。それゆえ、その想定は、感覚日記と呼ばれてきた。伝統的な解釈では、この感覚日記が私的言語の具体例だとみなされてきた。けれども、私的言語の定義から直観的に感覚日記という想定が思い浮かぶわけではなく、§243 後半のみでは、§258 冒頭にて感覚日記が登場する理由に答えることは容易ではない。伝統的な解釈にもとづき、§258 で私的言語の不可能性が示されていると解釈するためには、感覚日記が私的言語の具体例であると言えなければならない。とはいえ、その論拠を、§258 単独で見出すことは困難である。それゆえ、伝統的な解釈では、感覚日記が私的言語であることを議論の出発点としている。だが、本来、§258 が私的言語の不可能性を示していると主張するためには、感覚日記が私的言語の想定例と言える理由を明らかにしなければならない。さらには、感覚日記が私的言語の想定例であることを示すためには、§258 以前の各節を参照する必要がある。

したがって、本稿では、§243・§258 といった単独の節を分析するのではなく、それらの

[6] たとえば、(丸田 1988) を参照されたい。もしくは入門書だが、(野矢 2022) を参照されたい。ただ野矢は、私的言語の不可能性が、§243 以前の論証からすでに示されていると解釈しているため、本稿の見方と根本的に異なる。野矢の見解では、私的な規則に従うことができないことを論拠として、言語の必要条件に複数人の存在を見出している。

節と関連した箇所を一連の議論として分析する。その分析の結果、感覚日記という想定がどうして登場するのか、その想定から私的言語の不可能性がどのように主張されているのか、を明らかにする。それにより、§258 が私的言語論の中核をなしていると言える理由に回答を与える。このことを、本論文の目的とする。

以上を論じるにあたり、第Ⅲ章では、私的言語の定義とその特徴を確認する。はじめに、私的言語の定義から、「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」ことをそれぞれ抽出する。次いで、私的言語の定義から抜粋した各論点が意味することを日常的な言語使用との比較から説明することで、私的言語の想定に必要な条件を明らかにする。

第Ⅳ章では、感覚日記が私的言語の定義から導かれた想定例であることを指摘した後、私的言語の不可能性がどのようにして示されているのかを検討する。そのためにまず、前章で分解した私的言語の定義のうち、いずれかを満たすような言語を考察することで、定義のすべてを満たす言語こそが感覚日記であると言及する。感覚日記が私的言語の具体例であることを確認した後、感覚日記の議論で私的言語の不可能性が示されていることを明らかにする。具体的には、内的な直示的定義では記号の同一性を正当化するために同一のものを持ち出しているため、そのような正当化は正当化と呼べない、と論じる。そこから、私的言語とは、他人の誰もが理解できないだけではなく、当人さえも理解しているようにみえるだけであるため、私的言語は不可能であるという帰結を導く。

以上を踏まえて、本論文では、§258 は私的言語の想定例とその不可能性が示された箇所であるため、私的言語論の中核をなしていると結論づける。その結論は、私的言語論の伝統的な解釈でも明らかにされてきたことではあるが、本稿ではその論拠を特定の節だけでなく、一連の議論に置こうとする。連続的に読み解くことに、本論文の意義がある。なぜなら、§258 単体で読み解くとすれば、感覚日記が私的言語の想定例であることに論拠を示せないだけでなく、その不可能性に関しても誤読の可能性を孕むからである。

第Ⅴ章では、前章までで示した本論文の意義が、私的言語論の伝統的な解釈に与えうる別の役割を示そうとする。伝統的な解釈では私的言語は不可能であるという結論は共通しているが、各論者の間には見解の相違がみられる。その争点となる問いは、他人の存在なしにつくられた言語は私的言語に含まれるか、である。本稿では、その言語の想定自体が、前章までで明らかにしてきた『探究』の内容と離れているため、私的言語に関する議論と分けて考えるべきである、と指摘する。それゆえ、その言語は私的言語ではない、と回答する。その論拠は、§§243-58 を一連の議論として精読することで、すでに明確となっている。だからこそ、各節を連続的に捉えようとする、本論文の読み方には意義があると論じる。

Ⅲ　私的言語を検討するために前提となる条件

本章では、まず私的言語の定義とその特徴を確認する。その上で、定義から抽出される「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」こととの各論点が、私的言語を想定するために必要な前提であると指摘する。

上記に取り組むにあたり、第１節では、§243 を分析して、私的言語の定義を確かめる。さらには、前半部分における独り言の想定と後半部分における私的言語の想定とを対比させることで、独り言の想定がどのような役割を果たしているのかを考察する。本稿では、他人が介入できないという私的言語の私的性格を強調するために、独り言の記述は必要であると主張する。

次いで、私的言語の定義から抜粋した各論点を検討することにより、それぞれの定義は何を意味するのかを明らかにする。そのためにまず、第２節では、§§244-5 を分析することで、日常における語と感覚の指示関係を説明する。それにより、直接的に感覚を指示するとは、自然な感覚の表出なしに、語と感覚を結びつけることだと指摘する。続く第３節では、§§246-8 の分析の結果、どのような意味で感覚は私的と言えるのか、を解説する。それにより、指示する感覚が私的であるとは、当人のみが感じるものを対象とすることを意味すると論じる。このように本章で取りあげた各節を読み解くことによって、私的言語の特徴を確認しつつ、次章で私的言語を想定するために必要となる条件を示す。

１．私的言語はどのような言語か：§243 の分析

『探究』の私的言語に関する議論は、§243 の後半部分から展開されることが少なくない。なぜなら、後半部分で想定される言語こそが、私的言語だと解釈されてきたからである。それゆえ、私的言語の登場しない前半部分の記述は、さほど重要な箇所とみなされてこなかった。本稿は、後半部分の想定が私的言語であるという読み方に異論を唱えるつもりはない。とはいえ、そうした解釈の是非とは関係なく、私的言語が途中まで登場していないことに対して、何らかの説明があって然るべきだ。もし仮に、§243 の必要性を私的言語の定義のみに求めるならば、それ以前の記述は不要だと言える。だが、事実として前半部分の記述がある以上、その部分もまた私的言語論、あるいは『探究』にとって必要だとみなすべきである。したがって本稿では、§243 を順に分析することで、前半部分の記述が必要である理由を考察する。以下は、その引用である[7]。

> ひとは自分自身を励ましたり、自分自身に命令を与え、従ったり、自分自身を非難し、罰したり、自分自身に問いを立て、その問いに答えたりすることができる。だから独り言のみを口にする人々を想像できるだろう。その人たちの行動は独り言を伴っているのだ。―その人たちを観察し、その人たちの喋りを注意深く聞くある研究者は、その人たちの言語をわれわれの言語へと翻訳できるかもしれない。（研究者は翻訳によって、このような人々の行動を正しく予測できるだろう。なぜなら、研究者は人々が意図や決

[7] 本稿では、引用含め節番号のみが示されている場合は、『哲学探究』（*Philosophische Untersuchungen*）を指している。なお本書の引用はすべて、Wittgenstein, L.（2009）*Philosophische Untersuchungen / Philosophical Investigations*, revised 4th ed. Hacker, P.M.S. & Schulte, J. eds. Wiley-Blackwell.を訳したものである。また、特にことわりのない場合、傍点などで強調している箇所は、原著にてイタリック体で示されていることを指す。

心を発するのも聞くからである。）（§243）

はじめにウィトゲンシュタインは、いくつかの例を出している。たとえば、自分自身に命令をして、それに自分自身が従うことである。このような例を挙げることで、ある言葉の話者も、その言葉の受け手も自分自身であり、その言葉で指し示すような行動をするのも自分自身である場合を示している。さらには、そのような言葉と行動のみで成立するような状況を想定している。つまり、独り言だけを話し、その独り言に応じた行動をとるような人々をここで想定している。

引用の続きでは、独り言のみを口にする人々の想定に加えて、研究者と呼ばれる存在が登場している。研究者とは、独り言を話し、その独り言に応じた行動をとる人々を観察する立場にいる。研究者は、観察の結果、そのような人々の行動を通じて、その人々特有の言葉をわれわれに分かる言葉へと置き換えることができる可能性がある。

たとえば、観察対象の一人が、「クワ」とその人自身に向けて言った後に、歩き始めるとする。このことを十分に観察した研究者は、「クワ」を「歩け（＝自分自身に対する命令）」に置き換えることができる。また研究者は、「クワ」という独り言が別の場面で使われたとき、あの人はこれから歩き始めるだろうと予測することもできる。

このような変換や予測が可能となるのは、そうした人々の行動が独り言を伴ったものであるからだ。言い換えれば、特有の独り言を発した場合、その独り言に応じた行動があるため、その語は研究者の立場からも理解可能なものとなっている。また、このような研究者の予測には、正しさが保証されている。なぜなら、研究者は人々の行動を勘で推測しているのではなく、その行動に伴う独り言から予期しているからだ。

以上のことを、次のように要約する。独り言のみを口にする人々という奇妙な想定において、たとえ独り言がその人々特有の言葉であったとしても、他人から理解される可能性が残されている。その独り言に応じた行動があるからだ。他人は、その独り言と行動との結びつきから、その人々が独り言をどのような状況で発しているのかを知ることができる。したがって、そうした独り言は他人に理解可能な言語であると言える。

ここまでが前半部分の内容である。私的言語論の核となる私的言語が登場するのは、この先の引用である。そのため、続きを参照することで、私的言語を確認しつつ、§243 全体がどのような構成となっているのかを考察する。

しかしながら、ある人が自分自身で使用するために、自分自身の内的体験―感覚や気分など―を書き出したり、言い表すことのできる言語もまた想像されうるだろうか？――それこそわれわれの日常言語で可能ではないのか？　―けれども、私はそのようなことを言いたいのではない。この言語に含まれる言葉は話者のみが知ることのできるもの、つまりその人の直接的で私的な感覚を指示するものなのである。それゆえ、他人はその言語を理解できないのだ。（§243、傍点引用者）

ここでは、ある言語は想定可能かどうか、が問われている。その言語とは、ある人が自分自身の感覚や気分といった内的体験を、自分自身のためだけに書き出したり、言い表したりすることができるものである。こうして想定された言語こそが、伝統的に私的言語だと捉えられてきた[8]。

続く引用部分では、このような言語の想定に対して批判がなされている。そうというのも、ある人の内的体験を自分自身のためだけに記述することは、すでに使用されている日常言語によって可能であるかのように思われるからだ。たとえば、ある人は痛みという内的体験を、その人しか閲覧できないノートに「痛み」と書きつけることができるだろう。

だがウィトゲンシュタインは、そうした事態を想定しているのではない。なぜなら、ここでいう内的体験とは、日常で使用される「痛み」という言葉では表せないからである。言い換えれば、「痛み」では、その人の直接的で私的な感覚を指示できていないのである。ウィトゲンシュタインは、日常言語の使用と私的言語の使用とを区別している。

本論文では、「その人の直接的で私的な感覚を指示する」という私的言語の定義を、二つに分解して考察しようとする。具体的には、「直接的〔unmitelbaren〕に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的〔privaten〕である」こととを定義から抽出し、それぞれを異なる論点として検討する。この理由は、本稿全体を通じて明らかにする予定であるが、端的に言えば、各論点をそれぞれ独立に考察するために、『探究』の各節が構成されているかのように読めるからだ。そのような読み方では、その二つの条件とも呼べる定義を満たした想定こそが、「感覚日記（§258）」であると解釈できる。それゆえ、私的言語の定義（§243）から、感覚日記という想定（§258）が導ける理由に回答を与えることができる。

最後に、§243 の前半で登場した独り言と、後半で登場した私的言語との違いを確認する。大半の先行研究は、前半部分を引用していない。しかしながら、ウィトゲンシュタインがあえて想定していることの必要性を汲み取ろうとすれば、両者には何かしらの繋がりがあると考えられる。本稿では、それぞれの想定を対比させることで、§243 が独り言の想定から始まっている理由に答える。

これまでの分析から、独り言と私的言語との違いを、他人から理解可能かどうかという点に見いだすことができる。独り言が理解可能な理由は、言葉に応じた行動があるからだ。それに対して、私的言語が理解不可能な理由は、言葉に応じた行動がないからだと考えられる。それゆえ、私的言語で指し示していることを、他人はわれわれの言語へと変換することができない。

このように私的言語と独り言とを対比させることで、私的言語では、その言葉に伴う行動が無いと解釈することができる。この解釈によれば、§243 が独り言の想定からなされているのは、私的言語の私秘性を際立たせるためだと考えられる。私的言語の場合、他人が観察することさえも意味をもちえず、他人の立場を介入させる余地すらない。つまり、独り言よ

[8] このことは先行研究で一致している。たとえば、（野矢 2022, p. 135）を参照されたい。

りも個人で完結している言葉こそが、私的言語だと言える。したがって私的言語とは、一切の他人の排除という私的性格に支えられた言語であると言える。本稿では、この私的言語の私的性格を示すために、§243 が私的言語と似て非なる想定から論じられているのだと解釈する。

２．直接的に感覚を指示するとは何を意味するのか：§§244-5 の分析

ウィトゲンシュタインは、§243 以降、§256 に至るまでは私的言語そのものを考察していない。だが、それ以前の各節では、私的言語で前提とされる条件に焦点をあてている。本章では、「直接的に感覚を指示すること」と、「指示する感覚が私的であること」とを主軸に据えて、各論点と特に関連が深いと思われる節を分析の対象とする。

はじめに本節では、§§244-5 を分析することにより、語は感覚をどのように指示しているのか、という問いに対するウィトゲンシュタインの回答を説明する。この回答を踏まえて、直接的に感覚を指示するとは何を意味しているのかを明らかにする。

> どのようにして語は感覚を指示するのか？　―ここには何ら問題がないように思われる。そうというのも、日々われわれは感覚について語り、それら感覚を名指しているではないか？　だが、どのようにして名前と名指されたものとの結びつきが生み出されるのか？　この疑問は、どのようにしてひとは感覚の名前の意味を学ぶのかという疑問と同様である。たとえば、どのようにして「痛み」という語の意味を学ぶのか？（§244）

はじめにウィトゲンシュタインは、どのようにして語は感覚を指示するのか、と問うている。私的言語を考察するにあたり、定義のうちにもあるように、語と感覚との指示の関係を検討しなければならないからだ。すなわち、私的言語が成立するか否かを考察するうえで、私的言語の条件である指示それ自体を問う必要がある。§244 は、日常の言語使用を念頭に置いて、指示についての議論を展開している。

ウィトゲンシュタインによれば、語が感覚を指示することには問題がないように思われる、とある。そうというのも、日常的に人々が感覚について語るとき、そこで用いられる語はその感覚を名指しているように思われるからだ。たとえば、ある人が蚊に刺されて、「痒みがある」と言ったとする。この場合、その人は蚊に刺された箇所に生じる特有の感覚を、「痒み」という言葉で言い表している。つまり、その人は特定の感覚を名指しの対象として、それを「痒み」という名前で表現している。したがって、日常の場面を想定した際に、ある語は感覚を指示することには問題がないように思われる。そのような感覚語の使用に問題がないとすれば、そこで成立しているであろう、語が感覚を指示することもまた問題がないはずだ。

しかしながら、後の引用では、どのようにして語は感覚を指示するのか、という元々の問いが、どのようにして名前（感覚語）と名指されたもの（感覚）との結びつきが生み出され

るのか、に言い換えられている。問いが変わっている理由や、当初の問いへの回答については言及されていない。

さらにウィトゲンシュタインは、どのようにして名前と名指されたものとの結びつきが生み出されるのか、という問いすらも、どのようにして人は感覚の名前の意味を学ぶのか、に換言している。最後の問いに対しては、§244 の続きで回答がなされているため、以下で確認する。

> 一つの可能性がある。それは、語が原初的で自然な感覚の表出と結びつき、その表出の場所にあてがわれるというものだ。ある子どもが怪我をして、泣き叫ぶ。そこへ大人たちがその子に話しかけ、叫び方を教え、その後に文を教える。大人たちは子どもに新しい痛みのふるまいを教える。（§244）

ここでは、どのようにして人は感覚の名前の意味を学ぶのか、という問いに関して一つの可能性が示されている。その可能性とは、語が原初的で自然な感覚の表出と結びつけられ、その表出の次元へと割り当てられるというものだ。具体的な場面を例にして説明すると、次のようになる。

けがをした子どもは当初、泣き叫ぶのみであった。すると、そこへ大人たちが来て、「大丈夫？　痛かったよね」などと子どもに語りかける。さらには、「痛い！」などの言葉による叫び方や、「ここが痛かった」などの状況に応じた文を教える。大人たちは、このようにして状況に応じたふるまいを教える。その結果、子どもは同じような怪我をした場合、ただ泣き叫ぶのではなく、「痛い」などと言えるようになる。

大人たちが新たな痛みのふるまいを教えることで、子どもは痛みを表現する手段としての言葉を学ぶことができる。その子は、ある感覚語がどのように用いられているのかを学ぶことによって、ある感覚の名前の意味を学ぶことができる。

> 「では君は『痛み』という語が本当は泣き叫ぶことを意味すると言っているのか？」―とんでもない。痛みの言語的な表現は泣き叫ぶことに取って代わるのであり、泣き叫ぶことを描写しているのではない。（§244）

続く引用箇所では、先ほどの感覚語の学び方について、痛みが意味するのは叫びそのものであるのか、という疑問が持ち出されている。すなわち、語は原初的で自然な感覚の表出を意味しているのか、と問われている。

ウィトゲンシュタインは、その捉え方を否定している。「痛み」という言葉による表現は、泣き叫ぶという原初的で自然な感覚の表出に取って代わるのであり、泣き叫ぶこと自体を表現しているのではない。そこで教えられた言葉は、あくまで泣き叫ぶことの代替として使用されている。

ウィトゲンシュタインは、名前と名指されるものとの結びつきは、言葉が原初的で自然な感覚の表出に取って代わることで生じると説明している。では、この説明は、どのようにして語は感覚を指示するのか、という序盤の問いに答えたものなのか。その問いを検討するために、留意すべきは、ウィトゲンシュタインが巧みに、語と感覚の関係を、「指示する〔beziehen〕」から「結びつく〔verbunden〕」へ言い換えている点である。「指示する」と「結びつく」とは同一視してよいのか。もしそれらが等しく用いられているならば、子どもが感覚の名前の意味を学ぶ状況、つまり語と感覚を結びつけている状況は、語が感覚を指示することの具体例だと言える。だが、それらが別のことを意味するならば、語が感覚を指示しているかどうかに言及していないこととなる。結論から言えば、あえてウィトゲンシュタインは「指示する」を「結びつく」と言い直していると考えられる。§244 では、日常的な感覚語が感覚と結びつくことのみを認めていると解釈できる。

先述した子どもの例において、大人たちがその子に感覚語を教えることができたのは、その子と大人たちとの間にふるまいの一致があったからである。なぜなら、大人たちが感覚語を教えるために必要となるのは、感覚という名指される対象の存在ではなく、泣き叫ぶという感覚の表出であるからだ。実際に感覚の表出がなければ、大人たちはその子どもが痛いのだと知ることはできなかっただろう。それにもかかわらず、われわれは感覚の表出と切り離して、独立した感覚の存在を自明視する傾向がある。

たとえば、その子どもが泣き叫ぼうが黙っていようが、痛みは存在していると言いたくなるかもしれない。すなわち、そうした子どもの状態とは関係なく、感覚の有無があることを認めようとしたがる。それは、感覚という独立した対象があり、それを表現するために感覚語があると思い込んでいるからだ。その思い込みの前提には、感覚語は感覚という対象それ自体をまさに意味するのだという言語理解がある。だが、こうした言語理解を受け入れるならば、各人同士の感覚をどのようにして同定しているのか、が問題となる。言い換えれば、異なる個人の感覚を同じ感覚語で言い表せるのはなぜか、という疑問が浮かび上がる。

ウィトゲンシュタインは、こうした言語理解を退けるために、はじめて感覚語を学ぶ場面を想定していると考えられる。そうというのも、日常的な感覚語は各人に共通する感覚の表出を媒介にして感覚と結びつくと説明しているからだ。一見すると日常的な感覚語は感覚を指示しているようにみえるが、その実、その語は感覚の表出によって感覚と結びついているにすぎない。つまり、異なる個人の感覚に同じ感覚語を用いることができたのは、自然な感覚の表出が同じであったからだ。ウィトゲンシュタインは、このような日常の感覚語と感覚の結合関係を「結びつく」と表現している。

こうした日常的な感覚語と感覚の結合関係を、本稿では、あえて間接的な指示の関係と呼ぶことにする。その理由として、「直接的に感覚を指示する」ことが、私的言語の定義に含まれているからである。その表現から推測されるに、ウィトゲンシュタインは感覚語の指示をつねに直接的だとみなしていない。その指示がつねに直接的なものに限られないのは、本節で確認したように、直接的でないにもかかわらず、指示の関係とみなされる言語使用、あ

るいは言語理解があるからだ。ウィトゲンシュタインは日常的な感覚語における指示（結びつき）と、私的言語における指示とを区別するために、あえて私的言語の場合を、「直接的」と表現しているのだろう。それゆえ、私的言語で問題視される語と感覚の関係とは、日常の場面をいくら想定しようとも登場しない。

したがって、本稿では、日常において語が感覚を指示しているかのように思われる関係を、私的言語で問われる直接的な指示の関係と対比させて、間接的な指示の関係と表現した。そして、だからこそ、私的言語は感覚を指示しているのかではなく、私的言語は感覚を直接的に指示しているのかを問う必要がある。§245 はそのことを端的に述べている。

> いったい私は、どのようにして痛みの表出と痛みとの間にさえも、言葉を持ち込もうとすることができようか？（§245）

§245 でウィトゲンシュタインは、感覚の表出と感覚との間に、言葉を介入させることを疑問視するのみである。つまり、語が感覚を直接的に指示することは可能であるのか、と問うのみである。その答えをウィトゲンシュタインは示していないが、私的言語を明確にするうえで必要不可欠な疑問であるため、次章で回答を示す予定である。

本節の分析では、ウィトゲンシュタインが、語が感覚の表出を介して感覚と結びつくこと、つまり、語が感覚を間接的に指示することを認めていることが明らかとなった。他方、語が感覚を直接的に指示することに関しては疑問が呈されるのみであった。私的言語を想定するためには、「直接的に感覚を指示する」言語を想定しなければならない。すなわち、私的言語は感覚の表出なしに感覚と結びついていなければならない。次章では、本節の問題意識を引き継ぐかたちで、議論が展開されることとなる。

３．感覚が私的であるとは何を意味するのか：§§246-8 の分析

ウィトゲンシュタインは、§§244-5 に引き続き、§§246-8 でも私的言語にとって重要となる前提について言及している。そうというのも、それらの節では、「私的」という言葉について吟味しているからだ。それゆえ、私的言語の定義に含まれる「指示する感覚が私的である」ことを考察するために、重要な分析箇所となっている。

次の引用を参照することで、「私的」という言葉をウィトゲンシュタインがどのように考えていたのかを明らかにする。

> ところで、どんな意味で私の感覚は私的であるのか？　―そうだな、私が本当に痛いかどうかは私のみが知るのであり、他人はそれを推測することしかできないということだ。―このことはある意味では誤りであり、別の意味では無意味である。もしわれわれが「知る」という語を普通に使われるように用いるならば（そして、いったいどのようにしてその語をわれわれは使用すべきなのか！）、そのとき私が痛い場合、他人はその

> ことを時々よく知るのである。―そうだ、しかしそれでも、自分自身で知るような確実さをもって他人は知っているのではない！―そもそも私は私が痛いことを知ると（およそ冗談を除いて）私について言うことはできない。およそ私は痛みを感じるということ以外に―その言葉は何を意味することになっているのか？／他人は私の行動のみから私の感覚を学ぶ、とひとは言うことはできない―なぜなら、私に関して私の感覚を学ぶと言うことはできないからだ。私はそれを感じるのだ。（§246）

まずウィトゲンシュタインは、感覚が私的とはどのような意味なのか、を問うている。その問いに対して、ある人が痛いかどうかということは、その人のみが知っており、他人はその痛みを推測しかできないため、感覚は私的であると答えられている。換言すれば、私が痛いかどうかを私のみが知る、ということである。

しかしながら、引用の続きでは、そうした私的さとは、ある意味では誤りであり、別の意味では無意味であると言われている。そうというのも、他人であっても、当人の感覚を知ることができるからだ。たとえば、「私は階段から転げ落ちてうずくまっていた。彼はその一部始終を見ていたので、私が痛かったことを知るはずだ」などである。このようにして、「知る」を用いることに違和感はないはずだ。また、§244 で大人たちは、子どもの自然な痛みの表出に気づくことで、その子が痛いのだということを知ることができていた。したがって、他人であっても私の痛みを知ると言うことはできるため、私が痛いかどうかを私のみが知る、とは誤りであると言える。

その主張に対して、私と他人とでは、痛みを知っている度合いが違うだろうという反論が挙げられている。そうというのも、他人からしてどれほどに痛そうに思えても、実際に痛いことはないからだ。それゆえ、当人のみが確実に痛みを知るようにみえる。

だが、こうした反論も退けられている。自分自身の痛みに対して、「私は痛みを感じる」と言うのではなく、「私は私が痛いことを知る」と言うことに意味がないからである。その言い換えに意味がない理由は明示されていないが、おそらく「私は私が痛いことを知る」が意味をもつならば、その反対の「私は私が痛いことを知らない」も意味があることとなってしまうからだろう。けれども、「私は私が痛いことを知らない」ことはないため、そうした言明は無意味である。したがって、自分自身の痛みに対して「知る」とは言えないため、私が痛いかどうかを私のみが知る、とは無意味だと言える[9]。

以上のことから、感覚について「知る」という言葉を使用する場合、当人に対してではなく、他人に対して用いられることが判明した。つまり、「私が痛いかどうかを私のみが知る」とは言えない。そのことと同様に、「他人は私の行動のみから私の感覚を学ぶ」とも言えない。なぜなら、私は行動の有無にかかわらず、自分自身の感覚を学ぶことがないからだ。§244 で示したように、当人が学ぶと言えるものは、感覚語の使用の仕方であり、感覚そのもので

[9] （古田 2020, pp. 253-7）に同様の指摘がある。古田は、「知っている」とは知らない可能性のある場合に使用できるため、そのような知識概念を心に適用することはできない、と説明している。

はないからだ。私は自分自身の感覚を知るのでもなく、学ぶのでもなく、ただ感じるのみである。そのような感覚の私的さは、後の引用でも述べられている。

> 次のことは正しい。他人に関して、私が痛みを感じているかどうかをその人は疑っていると言うことには意味があるが、私自身に関して、それを言うことには意味がない。（§246）

感覚の私的さをより明確にするために、ウィトゲンシュタインは別の言語使用を例にしている。その言語使用とは、「ある人が痛みを感じているかどうかを疑う」である。この言明は、「ある人」に該当する人物が、他人であれば意味をもつが、私であれば意味をもたない。なぜなら、自分自身の痛みを疑う者は、感じていない痛みがあることも認めることになるからだ。この場合、「痛み」という語をどのような意味で使用しているか不明である[10]。その一方で、他人がその言明を有意味に使用できるのは、他人はその痛みを感じることができないからだ。つまり、疑うことが意味をもつためには、ある時は知っており、ある時は知っていないと言える必要がある。§247 でも同様のことが語られている。

> 「君が意図していたかは、君のみが知ることができる」。ひとは誰かに、「意図」という語の意味を説明する際にこう伝えることができるかもしれない。すなわち、その時にその文章は次のことを意味する。われわれはそのようにして「意図」という語を使うのだ。／（そしてここで「知る」とは、不確実さの表明が意味をもちえない、ということを意味する。）（§247）

§247 では、「君が意図していたかは、君のみが知ることができる」を例に持ち出している。この言明を、「意図とは、私のみが知るのであり、他人はそれを推測することしかできない」と解釈するならば、§246 と同様の困難を招くこととなる。意図も感覚と同様に、知らないということが当人の立場ではあり得ない。それゆえ、当人において意図を知っているということに意味はない。だからこそ、私はあなたの意図を知ることはないという不確実さの表明が意味をもちえない。

だが、その言明を字義通りに解釈するのではなく、特定の状況において解釈するのであれば、その言明は意味をもつと言える。たとえば、「意図」という語を習得していない人に対して、その語の使い方を説明する場面などである。

感覚の私的さとは、当人のみがその感覚を知っているという意味ではない。ウィトゲンシュタインは、感覚が私的かどうかを、感覚を知ることができるかどうかで捉えていない。そ

---

[10] 仮に、痛みを脳における C 繊維の発火と同一視すれば、感じていない痛みを想定できるかもしれない。だが、特別な状況を除き、毎回毎回、自分自身の C 繊維が発火しているかどうかを確認することで、自分自身が痛みを感じているかどうかを判断する者はいないだろう。

れでは、感覚は私的であるとは、どのような意味なのか。

> 「感覚は私的である」という文章は、「ひとはペイシェンスを一人で遊ぶ」という文章と比較可能である。（§248、傍点引用者）

ウィトゲンシュタインは、「感覚は私的である」と、「ひとはペイシェンスを一人で遊ぶ」とを比較しようとする。ペイシェンスとは、一人で行うトランプ遊びの一種であり、ひとがペイシェンスを一人で遊ぶことは自明である。それゆえ、「ひとはペイシェンスを一人で遊ぶ」を換言すれば、「ひとは一人でする遊びを一人で遊ぶ」となるため、内容が重複していることになる。その文章と照らし合わせるならば、「感覚は私的である」とは、「私的であるものは私的である」と言えるかもしれない。またペイシェンスを二人用の遊びに変更すれば、それはペイシェンスではない。すでに別の遊びであるからだ。おなじく感覚も私的でないとすれば、感覚だと呼べなくなるだろう。

本節の分析をまとめると、感覚はそれ自体ですでに私的なものであり、他人が知らないから私的であるのではない。私のみが感じるからこそ、私的であるのだ。ウィトゲンシュタインは、§§246-7 にて私の感覚を他人が知るのだと説明することで、知る／知らないという区分から私的さを切り離している。同様に確実／不確実という区分からも私的さを切り離している。さらには、§248 で私的とはすでに感覚という語それ自体に含まれていることを示唆する。

以上を踏まえて、私的言語の定義のうちに、あえて「指示する感覚が私的であること」とあるのは、感覚という語が必ずしも私的なものとして扱われないからだと解釈する。たとえば、§244 で示したような感覚語の場合を想定してほしい。そこで子どもが学ぶ「痛み」という語は感覚と結びつけられていても、その語は私的に指示しているとは言えない。そうというのも、大人たちは共通の感覚語を使用することで、その子と自分たちの感覚を同定していたからだ。その結果、「痛み」という言葉で指し示す範囲には、ある特定の人の痛みのみでなく、別の人の痛みさえも含まれてしまう。つまり、日常の感覚語は、当人のみが感じる痛みだけではなく、他人も知ることのできる痛みさえも意味してしまう。したがって、日常の感覚語は私的な感覚を指示していない。

しかしながら、ウィトゲンシュタインが私的言語で想定している言語に属する言葉は、その話者のみが感じるものを指示しなくてはならない。このように、ある人が感じたものだけを指し示すような言葉は、すでに使用されている言語にはない。したがって、そのような言葉は特別に準備されなければならず、だからこそ、そのような言葉からなる私的言語は成立するか否かが問われている。

これまで本章で明らかにしてきたことを要約する。第 1 節では、独り言と対比させることで、私的言語が他人の存在を認めない言語であることを確認した。さらには、私的言語の定義から、「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」こととの各論点

を抽出した。第２節と第３節では、日常言語との比較から、各論点が何を意味しているのか、を明らかにした。「直接的に感覚を指示する」とは、感覚の表出なしに感覚と語を結びつけることを意味しており、「指示する感覚が私的である」とは、当人のみが感じるものを対象とすることを意味していた。このように各論点が意味する内容を明らかにすることで、私的言語を想定するための前提条件を明確にした。

Ⅳ　私的言語の定義から想定されうる言語の考察

本章では、感覚日記が、私的言語の定義から導かれた想定であることを明らかにする。感覚日記こそが私的言語の具体例であることを指摘した後、私的言語が不可能であることが、どのようにして示されているのかを明確にする。

上記を論じるにあたり、はじめに、前章で分解した私的言語の定義のうち、いずれかを満たす言語を考察の対象とする。そうした言語を考察することで、定義における両方の条件を満たす言語でなければ、私的言語ではないことを示す。そのためにまず、§256 を分析することで、「指示する感覚が私的である」言語を想定した場合、その条件だけでは私的言語ではない理由を説明する（第１節）。この節では、自然な感覚の表出があるかぎり、他人に理解される可能性があるため、私的言語ではないと論じる。続いて、§257 を分析することで、「直接的に感覚を指示する」言語を想定した場合、その条件だけでは私的言語ではない理由を説明する（第２節）。この節では、既存の言語使用が前提にあるかぎり、他人に理解される可能性があるため、私的言語ではないと論じる。

最後に、前節までを踏まえて、感覚日記が、「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」こととを兼ね備えた言語の想定例であることを説明する（第３節）。さらには、§258 を分析することによって、そのような想定が不可能だと解釈されてきた理由を明らかにする。具体的には、内的な直示的定義では、その同一性を正当化するために同一のものを持ち出しているにすぎない、それゆえ、そのような私的な正当化は正当化ではない、と論じる。そこから、私的言語とは、他人の誰もが理解できないだけではなく、当人さえも理解しているようにみえるだけであるため、私的言語は不可能であるとする。以上より、私的言語の想定例とその不可能性が示されているため、§258 は私的言語論の中核をなすと言える、と結論づける。

１．私的な感覚を指示していれば私的言語か：§256 の分析

§256 以降、日常の言語使用から離れて、私的言語それ自体が考察の対象となっている。§256 では、「指示する感覚が私的である」言語を想定した場合、それだけでは私的言語と呼べない理由が語られている。

> さて、内的体験を記述し、私自身のみが理解可能な言語についてはどうか？　いかにして私はその語を用いて、私の感覚を表すのだろうか？　―われわれが普通にしている

> ように？　つまり私の感覚語が私の自然な感覚の表出に結びつけられるのか？　その場合、私の言語は「私的」なものではない。他人が私と同様にその言語を理解してしまうかもしれない。―しかし、私がいかなる自然な感覚の表出ももっておらず、感覚のみがある場合はどうか？　そして、その時に私は感覚と名前を単純に結びつけ、そうした名前を記述として使うのだ。―（§256）

はじめにウィトゲンシュタインは、自分自身の内的体験を記述した、他人から理解不可能な言語について問うている。そして、そのような言語を使用するならば、どのようにして自分自身の内的体験を表すのかを疑問視する。つまり、私的言語を再び議題にして、その語と感覚との指示関係を考察しようとしている。

次いで、どのようにして私的言語は感覚を指示するのか、という問いに対して、一つの方法が提案されている。その方法とは、ある人が自分自身の自然な感覚の表出に自分自身の感覚語を結びつけるというものである。この結びつけ方は、§244 における日常の感覚語の場合と同様であるが、私固有の感覚語を想定することで、当人のみが感じるものを対象にすることができるだろう。

たとえば、ある人が痛みを感じた際に、顔をしかめるという自然な痛みの表出をしていたとする。そこで、この人は顔をしかめた時に、その表出の代替として、「ポプ」と言うことにした。すなわち、その人は顔をしかめた時に、「ポプ」と発することにより、自分自身の痛みを「ポプ」という独自の感覚語に結びつけたとする。この「ポプ」という言葉は、その人の感覚のみを対象とするために新しく用意されたものであり、私的に感覚を指示していると言える。

だが、すぐ後に、その感覚語（ここでは、「ポプ」）は、「『私的』ではなくなる」とある。私的ではなくなる理由を示すためには、§243 前半で登場した研究者を思い出す必要がある。

研究者は、ある人の独り言とそれに応じた行動を観察した結果、その人特有の独り言をわれわれに分かる言葉へと置き換え、その人の行動を予測していた。つまり、研究者は言葉と行動の結びつきを観察することで、その言葉を理解可能なものにしていた。このような立場を想定した場合、「ポプ」という独自の言葉であれ、顔をしかめるという痛みの表出から、どのような状況で使われているのかを他人に理解されてしまう可能性がある。

そのような言葉が指し示す対象は、やがて私的ではなくなる。なぜなら、たとえ他人であっても、「ポプ」という言葉を当人と同じように使用できるようになるからだ。つまり、その言葉で指し示している対象が、私的な感覚に限定されなくなる。したがって、たとえ日常的に使用されていなかった新たな言葉であろうと、それは私的言語となり得ない。

最後にウィトゲンシュタインは、別の方法を想定している。その方法とは、ある人が自然な感覚の表出なしに、語と感覚を結びつけるというものである。この結びつけ方は、日常的な場合とは異なり、単純なものである。単純とは、語が感覚を直接的に指し示すことを意味している。§245 では、感覚の表出と感覚との間に言葉を介入させることに関して、疑問が

呈されるのみであった。この回答を示すためにも、そのような想定がウィトゲンシュタインによって思考されていくことになる。

２．直接的に感覚を指示していれば私的言語か：§257 の分析

§257 でウィトゲンシュタインは、前節で提示した問いを吟味している。その問いとは、ある人が自然な感覚の表出なしに、ある感覚とその感覚を意味する言葉を結びつけるとしたらどうなるのか、であった。§257 では、「直接的に感覚を指示する」言語を想定した場合、それだけでは私的言語と呼べない理由が語られている。

> 「もしひとが自分自身の痛みを表さない（呻いたり、顔をしかめたりなどしない）としたら、どのようになるのか？　その場合、『歯痛』という語の使用を子どもに教えることは不可能であろう」。（§257）

ウィトゲンシュタインによれば、自然な感覚の表出がない場合、その表出に取って代わるような言葉を、子どもに教えることは出来ない。なぜなら、§244 の想定例に基づいて考えるならば、そもそも大人たちは子どもの痛みに気づくことがないからだ。

§257 の続きを確認していく。

> ―そうだな、その子どもが天才で、その子自身で感覚の名前を発明すると仮定しよう！―だがこの場合、無論、その子がその語を使用する際、その子は相手に自分自身を理解させることはできないのだ。―そうであれば、その子はその名前を理解しているが、誰にもその意味を説明できない、ということなのか？　―だけれど、そもそも彼が「自分自身の痛みを名付けた」と言うことは、何を意味するのか？　―どのようにして彼は痛みの名付けを行ったのか？！　そして、何をしたにせよ、そのことはどのような目的をもつのか？（§257）[11]

この引用ではまず、感覚の表出に取って代わる言葉を教えられなかった子どもが、自分自身で感覚語をつくりだす場合を想定している。たとえば、ある子どもが痛みを感じたとき、「スピ」という新しい言葉をつくりだし、その痛みに「スピ」と名付けたとする。この「スピ」という言葉は、その子の感覚を直接的に指示している。なぜなら、自然な感覚の表出がないと仮定されているからだ。

さらには、その「スピ」という言葉は、私的な感覚を指示している。なぜなら、自然な感

[11] 引用の途中で、「子ども」から「彼」へと主語が変わっているのは、原文で「es」から「er」へとなっているからだ。英語版では、「he」で統一されており、違いが見受けられない。「彼」に該当する主語が「子ども」以外に登場していないため、単なる言い換えかもしれない。もしくは、そのような命名行為を行おうとする者を一般化して、「彼」と表現しているかもしれない。いずれにせよ、本稿ではその理由を明らかにするに至らなかった。

覚の表出がないため、その言葉を他人が理解することはできないからだ。それゆえ、他人はそれをどのようにして使用するのかを知ることができない。したがって、「直接的に感覚を指示する」言語は同時に、「指示する感覚が私的である」言語と呼べるかもしれない。そうだとすれば、この言語は私的言語の想定例だとみなせる。

つづいてウィトゲンシュタインは、次のように問うている。痛みの名付けを自分自身のみで行った子どもは、その名前を理解しているが、その意味を他人に説明できないのか。その回答は明示されていないが、他人から理解不可能な言語であることを考慮すると、説明不可能だと思われる。

そこからウィトゲンシュタインは、先の想定に対して、ある疑問を呈している。その疑問は、自分自身の痛みを名付けたとは何を意味するのか、である。すなわち、命名行為の意味を問うている。それに加えて、別の問いも挙げている。その子は痛みに名前をつけるということをどのようにして可能にしたのか。その子が感覚の名付けを可能にしたとするならば、それは何を目的としてなされたのか。それぞれ、命名行為の方法と、命名行為の目的とを問うている[12]。こうした疑問が列挙された後、引用部分の続きでは次のように語られている。

> ―ひとが「彼は自分自身の感覚に名前をつけた」と言うとき、その人は単なる名づけが意味をもつためには、言語において多くのことが準備されなければならないことを忘れている。そして、われわれは誰かが痛みに名前をつけたと話すならば、「痛み」という語の文法がここには準備されているのである。その文法は新しい語が配置される場所を示している。(§257)

ウィトゲンシュタインは、感覚の名付けが意味を持つためには、本来、言語の中で多くのことが準備されていなければならない、と言っている。さらには、痛みに名前をつけたと語るならば、そこには「痛み」という言葉の文法がすでにあり、そこが新たにつくられた言葉の位置を示しているのだと言う。

そのことを、たとえば、「本」を例にして説明する。「本を買う」は日常的に使用される言語使用の一つであるが、「買うを本」とは言わない。同様に、「あの人は本している」とも言わない。こうした言語使用は、通常、無意味と言える。なぜなら、これまで用いられてきた「本」という言葉についての文法に沿っていないからだ。

ウィトゲンシュタインのいう文法とは、「本」は名詞だから動詞として用いることができないということを意味するのでない。端的に言えば、文法とは、すでにある言語実践をもと

---

12 つづく引用では、ウィトゲンシュタインは命名行為の意味にしか言及しておらず、命名行為の方法と目的に関しては触れていない。ウィトゲンシュタインが有意味な言語使用の条件に意味の明確化を含めていることを考慮すると、方法と目的の明確化もまた有意味な言語使用の条件だと捉えていたかもしれない。

にした有意味な言語使用の手本を明示化したものである[13]。文法によって、ある文が有意味かどうかの判断が手助けされることがある。ある文が有意味かどうかは状況や時代などで変化するため、文法はつねに同じであり続けるわけではない。さらには、話者は文法をつねに意識することはなく、文法の誤りは言語使用の差異により明らかとなる。だからこそ、言語使用の手本とはなるが、言語使用の固定的な基準にはなりえない。このような文法の存在を、「あの人は本している」を例にして、改めて説明する。

通常、「あの人は本している」は意味をもたない。その理由は、その言語使用が、いわゆる日本語の文法に沿っていないからではなく、その言語使用が日常で有意味なものとして使用されていないからである。しかしながら、そのような言語使用であれ、状況次第では有意味な言語使用と捉えられる可能性がある。たとえば、「あの人は本している」という言語使用は、ある集団において、「あの人は集中している」という意味で用いられているかもしれない。その人たちの間で意味が共通していると思われるかぎり、それは有意味な言語使用である。したがって、両者の言語活動が問題なく行われていることが、その言語使用を有意味なものにしている。その判断の鍵となるのは、ウィトゲンシュタインが文法と呼ぶものである。一度、論点を天才児の想定例に戻す。

本節では、ある子どもが自分自身の痛みに「スピ」と名付けた場合を想定していた。ここには感覚の表出がないため、その言葉の意味を他人は理解不可能であった。しかし、いかなる命名行為であれ、それが意味をもつためには、言語のなかで多くの準備が必要とされていた。その準備こそが、すでにある文法を指していた。したがって、意味のある名付けとして成立させるためには、文法の存在が前提とされているはずだ。文法を前提とすることは、今まで使用されたことのない言葉であっても、例外ではない。この前提に言語使用上のジレンマがある。

「スピ」という言葉は、その子どもの私的な感覚を直接的に指示している。だが、この言葉を有意味な言語使用として認めるためには、その名付けの意味を明確にしなければならない。つまり、その言葉は何を意味しているのか、を明らかにする必要がある。たとえば、その子が「この『スピ』という言葉は、私の損傷した部位に生じる肉体的な不快感の名前を意味している」と言ったとしよう。あるいは、より簡潔に、「『スピ』とは、ある感覚の名前だ」と言ったとする。その場合、その子は「スピ」の意味を他人に説明できるかもしれない。しかし、同時に、その言葉は他人に理解可能なものとなる。なぜなら、その語の新しく配置される場所、つまり、その語の使用のされ方が定まるからだ。繰り返しになるが、他人に理解可能であれば、私的ではなくなる。たとえ直接的に感覚を指示していても、指示する対象が私的ではなくなるから、私的言語ではない。

これまでの内容を要約すると、以下のようになる。まず私的言語を想定するために、自然な感覚の表出なしに、感覚そのものと結びつく語をつくりだしていた。つまり、直接的に感

[13] 詳しい説明は、（野矢 2022, pp. 139-142、p. 188）や、（古田 2020, pp. 257-9）などを参考にされたい。

覚を指示するような語をあみだしていた。その語は、その人自身の感覚のみを指し示す言語であるため、私的な感覚を指示するものでもあった。だが、その想定に対して命名行為それ自体が問題視されるようになる。なぜなら、いかなる名付けであろうと、有意味な言語使用の手本とも呼べる文法が必要となるからだ。しかしながら、すでにある文法にもとづき、その名付けに意味を付与するならば、その言葉は他人に説明可能であると同時に、他人に理解可能なものとなる。したがって、私的であれば文法をもちえず、文法をもてば私的ではないというジレンマに陥ることになる。

私的言語とは、私的な感覚を直接的に指示しなければならない。本節の分析の結果、その私的さを保持しつづけるためには、既存の文法のなかに位置しない言語を想定しなければならないことが明らかとなった。こうした前提を踏まえて想定されるのが、「感覚日記（§258）」である。

３．直接的で私的である言語は可能か：§258 の分析

> 次のような場合を想像するとしよう。私はある感覚が繰り返されることについて日記をつけようとする。そのために、私はその感覚と記号「E」とを結びつけ、それを感じる日はいつもカレンダーにこの記号を書き込む。（§258）

その想定は、自分自身の感覚を日記につける、というものだ。この想定では、ある人が特定の感覚を抱いたとき、「E」とカレンダーの日付に書き込むことで、その日にその感覚が生じたことを記録している。つまり、「E」という記号とその感覚とを直接的に結びつけている。そして、この「E」という言葉は、その人の感覚のみを指し示すために新たに用意されたものであり、この点において私的な対象を指示している。

したがって、感覚日記とは、私的言語の定義である「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」こととの、どちらの条件も満たした想定となっているため、私的言語の想定例だと言える。それゆえ、感覚日記という想定が成立しうるか否かが、私的言語という想定が成立しうるか否かに一致する。だからこそ、§258 は私的言語論のなかでも重要視されてきたのであり、私的言語論の中核を担っている箇所だと言える。

けれども、§257 の想定もまた、同様の観点から私的言語の具体例だと考えられていた。現時点で、それらの想定に違いを見いだすことはできないが、両者の相違点については後述する。その違いを確認するためにも、§258 の続きを参照する。

> ――私が第一に言いたいのは、その記号の定義が述べられえない、ということだ。―だがそれでも、私は一種の直示的定義として自分自身に定義を与えることができる！―どのようにして？　私はその感覚を指し示すことができるのか？―普通の意味ではできない。だが私は記号を口にする、あるいは書く、そしてそれと同時に、私の注意をそ

> の感覚へと集中する―つまり、いわば、内的に感覚を指し示している。―しかしこの儀式は何のためにするのか？　そうというのも、それはそのようにしか思えないではないか！定義は記号の意味を定めるために持ち出されるのだから。―それはそうだが、そのことはまさに注意を集中することによってなされる。というのも、そのようにして、私は記号と感覚との結びつきを記憶に刻み込む。―だが「私はそれを記憶に刻み込む」が意味しうるのは、この出来事が、今後私はその結びつきを正しく思い出すということを引き起こす、ということでしかない。しかし、いまの場合、私は正しさの基準をもっていない。ひとは次のように言いたくなるかもしれない。私にとって正しいと思われるものは何であれ、正しい。そして、そのことは、ここでわれわれは「正しい」ということについて語ることができない、ということのみを意味している。（§258）

まず、感覚日記の場合、記号「E」の定義を述べることができないと言われている。それに対して、ある種の直示的定義が「E」では可能だと反論がなされている。この主張を吟味するにあたり、直示的定義とは何かということを確認する必要がある。

直示的定義とは、「（これは）X」と言って、その言葉で指し示そうとする特定の対象を指さすことによって、「その対象が、X である」と定義することである。これは人が何かを把握する、あるいは紹介するときなどに行われる方法の一つである。たとえば、ある大人が子どもにむかって「リンゴ」と言って、その子の前にある果物を指さす。そうすることで、子どもは目の前の対象と「リンゴ」という言葉とを結びつける。その結果、その子どもが、他の人々と同じようにその果物を「リンゴ」と呼び始めれば、リンゴの直示的定義はできている[14]。

先の主張では、記号「E」で直示的定義が可能だと言われていた。子どもがある果物に対して「リンゴ」と言えるようになるのと同様に、その人はある時に生じた感覚に対して「E」と言えるようになる。そのような定義が可能だと言っている。さらには、「自分自身に」とあることから、その定義は当人のみに把握されていれば問題ない。

こうした直示的定義によって、§257 のジレンマを乗り越えている。そうというのも、その記号「E」は日常言語の文法に属さないからだ。もし記号「E」の意味を誰かに尋ねられたならば、「E」としか答えられない。なぜなら、直示的定義とは、ある対象とそれを指し示す言葉以外に何も必要としないからである。「E」の文法は日常言語が介入してくることなく、「E」によってのみ成立している。つまり、「E」は単体で文法を構成している。したがって、私的であることと文法を必要とすることとが両立する。

また、「E」は「E」としか言えないため、本来、E を感覚だと言うことは誤りである。「『E』は、ある感覚を意味している」とするならば、§257 と同じジレンマに陥ることになるからだ。しかしながら、ここで登場する「E」に何の説明も与えないとすれば、ウィトゲンシュ

[14] 直示的定義はつねに誤りの可能性を孕んでいるという見方もあるが、本稿の扱える範囲を超えているため、言及しない。たとえば、（野矢 2022, pp. 17-20）を参照されたい。

タインが何を言っているのかがあまりに不明瞭となってしまう。そのため、便宜上、「E」が指し示すものを感覚とみなしている[15]。

次いで、そのような直示的定義では、どのようにして「E」は感覚を指し示せるのか、と問われている。その応答として、「E」と発しながら、もしくは「E」と書きながら、そこで向けた自分自身の注意を、その時まさに生じた感覚へと集中する、とある。この際、「普通の意味ではできない」とあるのは、リンゴなどと同じように直示的定義を行えないからだろう。そうというのも、「内的に」という表現からも伺えるように、自分自身の内的体験を実際に指さすことはできないからである。

それに対して、引用の続きでは、内的に感覚を指し示すことは、儀式のようだと揶揄している。その理由として、本来、定義とは記号の意味を定めるためにあるからだと言う。すなわち、「E」の定義では記号の意味が定まらない、と言っている。内的な直示的定義の場合、異なる日の記号の同一性を保証しようとするのは、ただただ「E」という独り言を発しながら、カレンダーに書き込むという行為のみである。だが、その行為は、感覚の同一性を保証しているようには思われない。そのため、その定義に基づいてなされていることが、意味不明な行為だとみなされている。

これに対して、次のような反論がなされている。その反論とは、記号の意味を定めるのは、注意を集中することで可能となっている、というものだ。なぜなら、注意を感覚に集中することで、「E」とその感覚との結びつきを記憶に刻むことができるからである。それにより、記号の意味はつねに同じであり続けると言える。

最後に、記憶によって記号の意味を同定できるという反論に対して、再反論がなされている。なぜなら、そもそも記憶に刻み込むことが意味をもつためには、その刻み込んだであろう結びつきを、その後も正しく思い出させなければならないためである。正しく思い出せていないならば、以前と異なる感覚が生じているのにもかかわらず、「E」とカレンダーに誤記してしまう可能性がある。そうであれば、きちんと記憶していないこととなる。したがって、記憶に刻み込むことが意味をもつためには、その結びつきの同一性を保証できるような正しさが求められる。

このような主張に対して、その内容を誤読して、次のような批判とその返答が挙げられるかもしれない[16]。だが、そのいずれもが誤った読み方の上に議論しているため、本稿では、そうした解釈の誤りを提示した後に別の読み方を論じる予定である。

まず、その批判とは、そこで思い出される記憶を正しくないとみなしてよいのか、である。その批判によると、先の主張では記憶に関する懐疑が持ち出されている、とある。なぜなら、先の主張は、記憶がつねに正しくないため、過去と現在との感覚の同定に誤りがあるかもしれない、と言っているにすぎないからだ。そうした記憶に関する懐疑は、「E」を次の時もきちんと思い出せていない可能性がある、という主張に等しい。だが、記憶それ自体を疑うな

[15] このことは、§261 を参照されたい。また、（野矢 2022, p. 143）に同様の指摘がある。
[16] 事実、§258 の一節がそのように解釈されてきたという指摘がある（ケニー 1982, pp. 254-5）。

らば、私的言語だけではなく、日常言語の場合もまた疑わしくなる。つまり、言語使用がすべて誤っているかもしれないことになる。

その批判に対して、次のように返答できるかもしれない。日常言語では、他の人間による訂正などがあるため、誤った記憶を正すことができる。つまり、複数人であれば意味の同一性を確認できるため、そこには正しさが保証されていると言える。だが、「E」のような一人称的な視点のみの場合はそうではない。なぜなら、他の人にとって、「E」という使用の正誤は不明であり、そこに誤りがあっても訂正できないからだ。すなわち、私的言語では、その使用が正しいかどうかを判断できる私以外の存在がいない。それゆえ、意味が定まっているかどうかは独断に委ねられる。当人が正しいと思えば正しいとされ、そもそも誤りが存在しないため、正しさについても語ることはできない。

このような批判と擁護のどちらもが誤っていると言える理由は、その議論が自己への信頼と他者への信頼（自己への懐疑）という対立のうえに成立しているからだ。いずれの主張も、意味の正しさを人数にもとづく信頼性に見出している点で大差はない。

私的言語において正しさがないというのは、状況次第で変動するものではない。そうというのも、私的言語とは原理的に、他人の存在それ自体が意味をもちえない言語であったからだ。この私的性格は、§243 で独り言と対比させることによって、すでに明らかにしている（第Ⅲ章）。他人が介入できる余地すらない私的言語において、他人が存在しないことを論拠にして、その不可能性を主張することは、前提のうちに不可能性が内包されていることを示唆させる。つまり、個人で成立する言語であれば、いかなる言語であっても不可能であるという帰結が必然的に導かれていることとなる。そうであれば、私的言語を考察する必要はなく、言語であれば何であれ、他人の存在が必要であるということだけを明らかにすればいいはずだ。

だが、感覚日記で問題となるのは、他人の存在の有無ではなく、主観的な視点のみで意味を付与しようとしたことである。つまり、私的言語を成立させるために行った、内的な直示的定義に、私的言語の不可能性は示されている。

記号「E」とは、「E」のみで指し示されているため、他人に理解不可能なものであった。では、当人にとって「E」とは何を意味するものとして理解されていたのか。それは、過去に感じたものを意味しているだろう。内的な直示的定義の場合、その記号が指し示す対象は注意を向けたこれである。集中する対象を定めることで、現在に感じるこれを過去に感じたあれ（以前のこれ）と同じものだと判断している。つまり、その人は、「E」をカレンダーに記入する際、過去の感覚である「E」を頼りにして、現在の感覚もまた「E」だと判断している。

だが、そのような正当化こそが正しくない。なぜならば、その人は、現在の「E」が生じたことを、過去の「E」の記憶と照らし合わせることで正当化しようとしているが、過去に感じたものと現在に感じたものとを同時に比較することは不可能であり、その比較は同一の対象同士となってしまうからだ。より丁寧に言うならば、現在の「E」が過去の「E」と同

じものだというために、そこで思い出された過去の「E」とは、現在に思い出されている「E」となってしまうからだ。つまり、正当化のために思い出されたはずの記憶とは、いままさに感じているものの記憶と区別不可能である。それゆえ、当人は過去の「E」と、現在の「E」を同定していると思い込んでいるが、実際には現在に感じた「E」と、現在に思い出している「E」を比較しているだけである。だからこそ、「E」の正しさはまったく同一の正しさによって保証されており、ここでは「正しい」ということは意味をなしていない。つねに正しいならば、正しいとは言えなくなるからだ。

私的言語は、当人にとって意味するものをきちんと定義できていない。なぜなら、その使用を正しく使えていることと、正しく使っていると思い込んでいることとに、区別ができないからだ。それにもかかわらず、あたかもその記号が何らかの意味をもったものとして使用されている。だが、上記で明らかにしたように、その記号に意味を与えようとする試みは破綻している。したがって、私的言語とは、他人の誰もが理解できないだけではなく、当人さえも理解しているようにみえるだけである。その記号は何も意味しておらず、それゆえ、私的言語とは不可能であると解釈できる。

本論文の目的は、§258 が私的言語論の中核をなすと言える理由を明らかにすることであった。前節までの分析によって、私的言語の定義から「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」こととを抽出し、それぞれの論点が意味する内容と、その両方が私的言語という想定に必要な理由を示してきた。そうした分析の結果、感覚日記という想定が私的言語の定義を満たしていることを明らかにした。感覚日記が私的言語の想定例であることがまず、§258 が私的言語論の中核をなすと言える理由の一つであった。さらには、感覚日記の議論を分析した結果、私的言語の帰結として不可能性が語られていることを明らかにした。その帰結も、§258 が私的言語論の中核をなすと言える理由になりうる。その帰結それ自体は、私的言語論の伝統的な解釈と一致している。しかしながら、本稿では、§258 以前との連続性で捉えることによって、記憶に関する懐疑に基づく批判とその返答を退けている。具体的には、内的な直示的定義に問題があることを、§257 の想定例との違いを踏まえることで明白にしている。

したがって、§258 が私的言語論の中核をなすと言えるのは、私的言語の想定例とその不可能性が示された箇所であるから、と答えることができる。また連続性の観点から捉えなおすことは、私的言語論の伝統的な解釈にその論拠を示すことを可能としている。あくまで本論文は一解釈にすぎないが、§258 を連続性から読み解くことで、そのような読み方に意義があることを示した。

V　本論文が示す別の意義

前章では、私的言語の不可能性がどのようにして示されたのかを明らかにした。具体的には、感覚日記を正当化するために持ち出された、内的な直示的定義ではその同一性を正当化するために同一のものが比較されているため、その正当化は正当化と呼べないことを明ら

かにした。そこから私的言語とは、他人の誰もが理解できないだけではなく、当人さえも理解しているようにみえるだけであるため、不可能であるという帰結を導いた。この帰結は、私的言語論の伝統的な解釈と相違ないが、先行研究では特定の節ばかりに言及している点に着目し、一連の議論から読解することの意義を示した。

本章では、連続的に読み解くことが伝統的な解釈のうちで、どのようなことを意味するのかを明らかにする。私的言語論の伝統的な解釈において、私的言語は不可能であるという結論は共通しているが、各論者の間には見解の相違がみられる。それゆえ、そのような論争に対して、本論文で示した意義からどのような回答を与えうるかを検討する。

まず、第１節では、各論者の特徴がまとめられている箇所を、スターンの論文より援用することで、それらの見解がどの点で異なるのかを説明する。私的言語論における伝統的な解釈では、私的言語がその話者にしか話されえないことに関して、見解の相違がある。そうというのも、私的言語のうちに、生まれた時から孤立した個人がつくりだした言語も含めようとする解釈があるからだ。

次いで、第２節では、前節で想定された言語は私的言語に含まれないことを明確にする。そのために、その想定が『探究』で扱う問題を超えていることを示す。ここでは、『探究』にて、そのような想定に関して言及されていないことを指摘する。それゆえ、そのような議論それ自体が、『探究』における私的言語に関する議論とは異なるものであると論じる。その論拠は、§258 以前を精読することによって示すことができる。このように別の議論を用いて、本論文の読み方の重要性を提示する。

１．伝統的な解釈における相違点

私的言語論の伝統的な解釈において、私的言語は不可能であるという帰結は共通している。だが、私的言語がその当人にしか理解されえないという点に関して、その意味を拡張して解釈する者もいる。そのような論者は、私的言語のうちに、直接的で私的な感覚を指示する言語に加えて、他人の存在なしに自分自身のためにつくられた言語を含めようと試みる。その試みを説明するために、スターンがその相違点を論じている箇所を参照する。

> 正統的な出発点は、ある人のみが理解できるような言語、私的言語という概念にある。この意味で、私的言語とは、期せずして話者が一人のみである言語ではなく、原理的に、複数の人間が話すことが不可能な言語である。しかし、問題となる私的性格〔privacy〕の正確な特徴づけには、深い見解の相違の問題がある。／マルコムやストローソンの『哲学探究』の書評で初期に定式を与えられた、ひとつの有力な読み方では、その私的性格〔privacy〕に関する問題は、私的言語という概念のウィトゲンシュタインによる導入における、「この言語に含まれる言葉は話者のみが知ることのできるもの、つまりその人の直接的で私的な感覚を指示するものなのである。それゆえ、他人はその言語を理解できないのだ」(『探究』§243) という、ウィトゲンシュタインの定義に諸端をなして

いる。この解釈では、私的言語を私秘的〔private〕としているのは、その言葉が私的な内的対象を指示するものであることにある。もう一つの主要な解釈の道筋は、エイヤーとリースによって初めて示されており、網の目を広げて、ある孤独な人、いわゆるスーパークルーソー、つまりデフォーのクルーソー[17]のような大人の漂流者ではなく、生まれた時から孤立したある人が自分自身のための言語を思いつくという思考実験の対象によって開発されるかもしれない言語を含んでいる。このような読みでは、私的言語を私秘的〔private〕としているのは、他者のいかなる助けもなしに開発されたものであることにある[18]。

ここでスターンは、私的言語が原理的に、複数人で使用できないという点に各論者の相違点が表れている、と指摘する。その違いは、大きく二つの解釈に分かれる。

マルコムやストローソンの解釈では、その言葉が直接的で私的な内的対象を指示しているため、私秘的な言語とみなしている。つまり、他人の存在の有無にかかわらず、その言語の話者はつねに一人となる。他方、エイヤーとリースの解釈では、私的言語の枠組みを広げて、他人が存在しないゆえに、私秘的となる場合も想定している。それはクルーソーに喩えて、説明されている。エイヤーとリースが想定するスーパークルーソーとは、生まれたときから一人であり、誰とも関わりをもたない人物である。それゆえ、その人が使用する言語は、誰かから教わったものではなく、自分自身のために自分自身でつくりだした言葉でしかない。スーパークルーソーでは、一切の他人の存在を排除している。このような見解の違いを踏まえて、次節では、スーパークルーソーが私的言語に含まれるか否か、を考察する。

２．他人がいなければ私的言語か

スーパークルーソーで想定された言語とは、他人の助けなしに、自分自身のためにつくられたものであった。その言語の特徴は私的言語と類似しているように思われるため、私的言語の異なる形態として、その可能性が問われることがある。だが、そのような言語の考察と私的言語の考察とは区別すべきである。

スーパークルーソーが可能かどうかという議論は、私的言語が可能かどうかという議論とは根本的に異なる。その理由は単純で、ウィトゲンシュタインが何ら言及していないからである。それにもかかわらず、私的言語に関する議論と混同されたのは、その私的性格が都合よく解釈されたことに起因する。しかしながら、そのような読み自体が『探究』を恣意的に取り出して、『探究』から離れて議論を行うような典型例である。つまり、話者が一人であるという言語を拡大解釈して、その上で議論を展開しているにすぎないため、私的言語に関する議論とは異なる。

これまで何度も確認してきたように、私的言語の定義とは、「直接的で私的な感覚を指示

[17] ダニエル・デフォーの小説『ロビンソン・クルーソー』の人物を指す。
[18] Stern 2011, p. 335.

する」(§243) 言語である。さらには、「それゆえ、他人はその言語を理解できない」(§243) のであり、私的言語と他人が理解不可能である言語とはまったく一致するわけではない。むしろ、他人に理解できるかどうかは、私的言語の定義から導かれる帰結にすぎない。だからこそ、その定義に沿っているかどうかを検討すべきである。

ウィトゲンシュタインが『探究』で示した定義は、「直接的で私的な感覚を指示する」(§243) ことである。『探究』において、この定義から導かれない言語は私的言語として考察の対象とされていない。つまり、その定義に含まれるものが、私的言語であり、それ以外は私的言語ではない。スーパークルーソーで想定される言語は、直接的に感覚を指示するものでもなければ、私的な感覚を指示するものでもない。それゆえ、私的言語に必要な条件を揃えていない。このような見解は、本論文の読みによって支えられている。そうというのも、その見解は、§258 以前を精読し、その定義が何を意味しており、その定義から導かれるような想定とはどのようなものであるのかを検討することで明らかとなるからだ。したがって、本論文の分析に基づくならば、スーパークルーソーの議論と、私的言語に関する議論とは切り離して考えるべきであり、スーパークルーソーで想定された言語は私的言語ではないと言える。

VI　結論

本論文では、まず§258 以前を精読することにより、「直接的に感覚を指示する」ことと、「指示する感覚が私的である」こととの両方が、私的言語という想定には必要不可欠であることを明らかにしようとした。

そのためにまず、第II章では、私的言語論の伝統的な解釈の概略を説明し（第１節)、§258 以前を読み解かなければならない理由を、先行研究における問題点を指摘することで論じた（第２節)。

次いで、第III章では、私的言語の定義と特徴を確認し（第１節)、その定義に含まれる「直接的」と「私的」とが何を意味しているのか、を日常の言語使用との比較で説明した（第２節、第３節)。

第IV章では、前章で明示した私的言語の定義のうち、いずれかを満たす言語を検討し、そのどちらもが私的言語ではないことを示した（第１節、第２節)。その結果、感覚日記という想定がまさに私的言語の具体例であることを示しつつ、私的言語の不可能性がいかにして語られているのか、を考察した（第３節)。この考察を通じて、私的言語の場合、その定義が他人だけではなく当人にも意味をもちえないため、不可能であるという帰結を導いた。この帰結は、私的言語論の伝統的な解釈と相違ないが、§258 単独に注視した読みでは、感覚日記という想定がなされている理由にすら答えることが難しい。それだけではなく、§257 の天才児の想定とどう異なるのかを踏まえなければ、誤読する可能性もあることを示した。

このようにして、§258 を一連の論証のなかに置き、§258 が私的言語の想定例とその不可能性を提示している箇所だと明らかにすることで、感覚日記が私的言語論の中核をなすと

言える理由を導いた。したがって、§258 を恣意的に取り出すのではなく、§243 からの連続性という観点で捉えなおすことは、私的言語論を読み解くうえで意義のあることだと示した。

最後に、第Ⅴ章では、私的言語の私的性格に関して見解の相違があることを確認し（第１節）、連続的に読み解くことで明確となった私的言語の定義から、スーパークルーソーで想定された言語は私的言語に含まれないと指摘した（第２節）。

しかしながら、本論文では、私的言語論全体に言及することはできなかった。私的言語論を一貫した論証として考察するためには、今回扱うことのできなかった各節も丁寧に分析し、他の節とどのような関連性をもっているのかを明らかにする必要がある。この点に関しては、もし私的言語論がひとつの独立した論証であれば、本稿で示したことの延長であるため、その全体を連続性で捉えることが可能である。

他方、私的言語論という枠組みで捉えること自体に根本的な問題があるかもしれない。実際に、私的言語論という枠組みを批判する解釈がある。たとえば、共同体主義である[19]。その解釈では、言語活動は何らかの規則に従っているとみなして、言語の必要条件に複数人であることを見出す。それゆえ、個人で成り立つ言語の想定に同意せず、言語を必然的に社会的なものだとみなす。その論拠は、大抵、§§138-242 の「規則に従うこと」に置かれる。共同体主義は、§243 に先立って私的言語の不可能性が示されていると主張する[20]。もし仮に、そうした主張に依拠して、ウィトゲンシュタインが私的言語の不可能性をすでに論じていると解釈するならば、その後の節で私的言語について改めて論じている理由が新たな疑問として浮かび上がる。

共同体主義が抱える難点に対して、私的言語論という枠組みを抽出することで、私的言語に先立つ議論から切り離して、その考察を行うことができる。その見解では、私的言語の不可能性を個人であるか否かに見出すことはない。本章で明らかにしたような不可能性はまさに、そのような解釈に合致する。だが、その不可能性を示すことで、逆説的に共同体主義を認めることになるかもしれない。なぜなら、私的言語で意味を与えられないことは、個人単位で意味を付与できないことを表しており、それゆえ、個人では言語が成立不可能であるかのようにみえるからだ。この主張を退けるためには、私的言語と似て非なる個人単位で成立する言語が可能であることを示せればよいが、その言語の考察は、前章で示したように、『探究』と離れた議論になる可能性が高い。その点において、共同体主義では、§243 以前の各節との連続性のうちに私的言語を捉えているため、『探究』をより大きな観点で捉えなおした場合、本稿の延長線上に位置する可能性もある。

このように、『探究』という視点から私的言語に関する議論をどう位置づけるか、につい

---

19 この読みの代表的な論者は、クリプキである（Stern 2011, p. 334）。

20 たとえば、（野矢 2022）の見解がそうである。野矢は、生活形式の一致を、規則に従うことの条件とみなしており、私的な規則の存在を否定する。それゆえ、§243 以前で私的言語の可能性は排除されている、と主張する。他方、（大谷 2020）では、言語活動は何らかの規則に従っているという解釈が否定されている。

ては考察の余地が残されている。しかし、本稿で分析した範囲は私的言語論の一部であり、その枠組み自体が適切かどうか、ひいては「規則に従うこと」との連続性で捉えてよいのか、などを言及するに至らなかった。

また、心的なものの語りの有意味性を、他人から理解可能な点に見出したことは、ウィトゲンシュタインを行動主義に位置づけかねない。けれども、『探究』の各節では、ウィトゲンシュタイン自身が行動主義ではないと明言しているかのような箇所が見受けられる[21]。そうであれば、私的言語の不可能性と、心的なものの存在の否定とは分けて検討すべきである。しかし、この点に関しても、『探究』の別の箇所を参照しなければならないため、本稿で十分に扱うことができなかった。本稿で引用した箇所のみで言及するならば、行動主義では、感覚語を感覚の表出を意味するものだとみなすだろうが、それはウィトゲンシュタインの見解とは明らかに異なる（§244）。

いずれにせよ、私的言語論、あるいは『探究』全体を概観することができなかったため、以上の二点を今後の課題とする。

参考文献

古田徹也（2020）『はじめてのウィトゲンシュタイン』、NHK 出版

ケニー、A.（野本和幸訳）（1982）『ウィトゲンシュタイン』、法政大学出版局

丸田健（1998）「『哲学探究』，感覚日記の議論について」、『科学基礎論研究』第 25 巻 2 号、pp. 77-82

野矢茂樹（2022）『ウィトゲンシュタイン『哲学探究』という戦い』、岩波書店

大谷弘（2020）『ウィトゲンシュタイン　明確化の哲学』、青土社

Stern, D.（2011）"Private Language", Kuusela, O. & McGinn, M. ed. *The Oxford Handbook of Wittgenstein*, Oxford University Press, pp. 333-50

Wittgenstein, L.（2009）*Philosophische Untersuchungen / Philosophical Investigations*, revised 4th ed. Hacker, P.M.S. & Schulte, J. eds. Wiley-Blackwell.（ウィトゲンシュタイン、L.（鬼界彰夫訳）（2020）『哲学探究』、講談社）

[21] §286、§§306-7 などを参照。